



果樹第2研究室のメンバー

するが湾の清水港の近く、海岸ぞいの町にある試験場である。昔は東海道の宿場町で、広重の絵にも興津之宿というのがある、町内の名にも本陣などというのもあり、名残りがそこ、こゝに散在している。

現在は、東海道線を興津駅で降り、駅前を左に曲り、つきあたらまた左に曲り、踏切りを越えると興津支場の正門である。所要時間約4～7分、東京から1時間40分、まず迷うことはないが5分以上歩いてもし正門がなかったら、行きかう人に聞けば、知らない人は多分ないと思う。なにしろ、明治41年からそこにあるのだから。

門に入ると、プラタナスの並木がすばらしい。開場とともに植えられたもので、60年近く、よく手の入った並木である。作られた並木としては、北大のポプラ、東大のイチョウ、興津のプラタナスは明治の並木として有名である。こゝのプラタナスは、東京のプラタナスとちがいがアメリカプラタナスでなく、本当のプラタナスである。冬は一名ゲンコツ並木といわれ、力強い樹の腕のようなコブが並んでいる。春は新芽が軟毛に包まれて春雨に濡れている。夏は緑が濃く、風通しよく、涼しく、町の人々の涼み場所になる。秋は紅葉が美しく、一見ヨーロッパ風である。

## 農林省園芸試験場興津支場

### 果樹第2研究室

広 瀬 和 栄

並木を通りぬけ、左に曲ると本館である。淡黄褐色の品の良い、落ちついたタイル張りである。玄関受付で、果樹第2研究室を聞いていただければ、丸顔の美人が案内をしてくれるだろう。

2階の西側の端にあり、居室は海側の南面である。室は風通しよく、夏涼しく冬暖かい。隠居にはよいが、時として居寝りのしたくなるような室である。

果樹第2研究室の仕事は、

1. ミカンに対するケミカルコントロール  
(除草剤・摘果剤・離層形成剤・催色剤・減酸剤・着花剤等々)
2. 果樹生理(ミカンの自然ホルモンの消長、エチレンの発生等について)
3. 連作障害(ミカンネセンチュウその他)
4. カキの育種

であり「カキの育種」は今までの仕事の続きで数年後には安芸津支場に移す予定である。

これだけの仕事を5人で切廻しているのだから大変である。1人で優に1研究室分の仕事をしているようなものである。

しかし、皆んな若いためか元気がよく、仕事に対する馬力が感じられ、平均年令32才であるためか、研究が面白くてしょうがないようなのが、私としても大変にうれしい所である。

仕事の内容は、

除草剤について、39年から始め5年目である。これまで各県の方々とともに研究をし、プロマシル、パラコート、DCPA+NAC、アメトリンをミカン産業に対して実用化してきた。ミカン農家から草管理の労力を現行の24分の1〜20分の1にまでできたと考えている。この薬のうち、DCPA+NAC剤については国産品として、またミカン園用安全除草剤として外国にない独自のものといえよう。もちろん、これのためには保土谷化学の方々の力が大きいことは論をまたないが……

ミカン園の草の基礎調査から、薬害、薬効の作用機作についても研究をしている。

摘果剤については、本年はじめてNAAを実用化できたが、これもこれからのミカンの品質を向上させるためにはどうしてもなくてはならない薬剤である。これもまだアメリカでも実用化していないにもかかわらず、日本が実用化に踏み切ったので問題もあるが、何とか使いこなしてゆきたいものである。

離層形成剤、これはミカンの収穫労力が全労働時間数の30%から時として50%におよぶことから、その省力化は目前の急務であるため、何とかミカンの実を振り落としたいと思っている。ミカンは、ただゆすっても落ちないため、生理的に離層形成をさせる薬剤がなければならない。これについて、当研究室ではリン製剤が効果のあることを発見し、本年の園芸学会で発表した。

催色剤についても、リン製剤の一種エスレルが着色効果があることを発見して、九州などの暖地ミカン園に福音をもたらすと考えられ、本

年から連絡試験を行なっている。

減酸剤については、手が廻りかねて、手をつけていないが、グレープフルーツの輸入とともに夏橙に対する影響大と考えて、夏ミカンの減酸剤を硫酸鉛に変わるべき毒性の低い薬剤を開発する予定である。

着花剤についても、1,2の薬で面白そうなのがあるが、本年は予備試験に止まったので、来年は本試験を組み、確実に増加するかを確かめたい。

果樹の生理については、本年ミカンオーキシンはIAA基をもっているようだが、分解の早い、かなり取り扱いにくい物質だろうということが明らかになったし、アブサイシン酸様物質が多く、また抑制物質の含量もかなり高いと考えられ、ミカンの生理作用を論ずるのに抑制物質のことにふれないわけにはゆかないだろう。

エチレンについても、新しい知見が得られた。

カキの育種でも、本年は新品種が発表できる予定である。9月下旬に、甘柿が食べられるだろう。

これらのことは、現平塚本場の果樹部長大畑徳輔氏が前室長時代に路線を引いて下さったためであるし、こゝでの多くの成果は、研究室員の皆さん（摘果剤は山本正幸、エチレンおよび成熟の生理は大東宏、除草剤は富水信行、ホルモンの消長は餅田友紀子）に負うところが多い。また、多くの薬の実用化にあたって最終的決定は、佐藤公一支場長によったものである。

いちど、お気軽に御来場下さい。ご来訪の時には、電話で予約下さい。

〔 筆者は、農林省園芸試験場興津支場

果樹第2研究室長 〕